

山と博物館

第26巻 第3号

1981年 3月25日

大町山岳博物館



フキノトウ

ふきのとうの想い出

今年は、例年になく残雪が多く、まだほとんど見られませんが、いつもの年だと、そろそろ日だまりの中に、ふきのとうが顔を出します。

私は、今年八十八才になりますが、毎年必ず春先には、ふきのとうを摘むことを春の最初の楽しみにしてきました。特に近所の「あわら(湿地)」には、たくさんふきのとうが出るので、とても家では、食べきれぬものがあります。大町の商家のうち、日頃お世話になっているところへ、毎年必ず届けさせてあげました。先方では、これを待っていてくれて、その時は、家族のことや、農作物のふきなどを話しながら、一時を過ごしていただくことが、また楽しみでした。

ふきのとうを摘む楽しみは、食べることもできることながら、長い雪に閉ざれた冬が終わった後の、春のうきうきするような、何ともいえない気分を味わえることです。

長い年月の間には、苦しいこと、悲しいことが、ずいぶんありましたが、こうして野に出ている時は、なぜか忘れることができました。

ふきのとうの出るあたりは、また五月末になると、山ふきが一面に出そろう、これも、山深いこの土地では喜ばれる、「山の幸」の一つです。

特に今年は、私がおもひついでから、かつてなかったような豪雪でした。彼岸の頃には、あの味噌と油でいためた、なんともいえないちよつと苦い春の味が味わえるかどうか心配しながら、少しずつ消えてゆく雪をながめ、曾孫と遊ぶ今日この頃です。

(大町市平源没在 荒井金重)

ライチヨウの病氣

宮野典夫

はじめに

ライチヨウは氷河時代の遺存動物といわれ、特別天然記念物にも指定されている。最近の登山ブームや産業開発によりライチヨウの生息している地域は人間により環境の変化をしいられている。このようなライチヨウを保護するため、大町山岳博物館では野外の調査と並行して飼育事業も進めてきた。人工気候室フ卵舎などの設備を充実させるため、一時的に断したが、昭和五十年から再びライチヨウの飼育に取り組んできた。飼育に関する資料が少ないライチヨウのフ化、育雛技術や餌と給餌方法など試行錯誤の中から適当な方法をみいだしての飼育で、飼育下第三世の誕生もし、十二羽の成鳥を飼育する時期もあつた。しかし、一度病気の発生がみられると、その原因、予防などがわかるまでに数羽が死亡してしまふという苦い経験もしている。死亡したライチヨウは松本畜保健衛生所にて解剖し、死因を探り、生存しているライチヨウへの処置の対策を検討している。

成鳥の死亡

過去六年間で飼育中に死亡したライチヨウの解剖所見が顕著にあらわれたもの、病名が判明したものを表にしめしたが、原因と考えられるものに業による副作用、トリアデノウ

イルスによる封人体肝炎、事故死、毛体虫症などがあげられる。

一、業による副作用

№1と№2は三十日令と五十二日令に鶏痘毒由来の予防液の翼膜穿刺を行なつたが、善感認められず、百五日令に鳩痘毒由来の予防液を穿刺したところ、善感を認めたが、元氣、食欲が低下した。各種予防薬の接種は検討の余地があるため、昭和五十年以後行なっていない。

№9は同室で飼育中のライチヨウが、トリアデノウイルスによる封人体肝炎で死亡した



ライチヨウの消化器と着着した盲腸(上部中央)

番号	産地	性	フ化日	死亡日	生在日数	病名	備考
1	爺ヶ岳	♂	S50.7.9	S53.3.11	976日		盲腸出血痕あり内容充満 心間脂肪の萎縮
2	〃	♂	S50.7.8	S50.11.10	125日	鳩痘ワクチンの副反応	筋胃にゴマ粒大のかいよう 右翼膜下に水腫性肥厚、翼末端には水腫
3	〃	♂	S50.7.9	S50.11.13	127日	〃	〃
4	〃	♀	S50.7.9	S52.6.7	699日	トリアデノウイルスによる封人体肝炎	肝臓に出血、脂肪肝状、トリアデノウイルスの封人体あり 腎臓は血流量に富む 筋胃にかいよう
5	〃	♂	S50.7.9	S52.6.13	705日	〃	肝臓に粘性性脂肪肝状、トリアデノウイルスの封人体あり
6	山博	♂	S51.7.9	S53.7.22	743日		心間脂肪の萎縮 右肺血流量に富む 小腸壁ひはく
7	〃	♂	S51.7.16	S51.11.11	118日	針金のみこみ	筋胃に針金が突出、肺まで達している 腹腔にリンパ液浸潤
8	〃	♀	S51.7.29	S53.3.26	605日		胆のう著しく膨大 盲腸と筋胃とゆ着し出血
9	〃	♀	S51.7.29	S52.10.10	438日	モラキセラ又は抗生物質の副作用	脾臓が萎縮
10	〃	♂	S51.7.29	S53.3.20	599日		脾臓が萎縮 小腸壁ひはく 盲腸内容物充満し粘膜炎は出血
11	〃	♀	S51.7.28	S53.6.15	322日	トリアデノウイルスによる封人体肝炎	肝臓表面が粘性性脂肪肝 盲腸にトリアデノウイルス封人体あり
12	〃	♀	S52.6.24	S53.1.12	202日	毛体虫症	盲腸に出血、壊死多発
13	〃	♀	S52.6.24	S53.7.6	377日		盲腸内容物充満
14	〃	♀	S52.6.24	S52.11.27	156日		右肺に米粒大の黄色物 小腸粘膜炎出血 盲腸出血、内容物がもれている
15	〃	♂	S52.6.24	S53.1.17	207日	毛体虫症	小腸壁ひはく 盲腸出血
16	〃	♀	S52.7.18	S53.1.5	172日		盲腸と小腸がゆ着、盲腸どうしがゆ着、 腸内容物がもれている

図1 成鳥の病氣

ため、抗生物質を断続的に投与した個体の一羽である。現在、異常を早期に見出した場合には、抗生物質の投与は極力避けて、ビタミンの強化と、ストレスを与えないことに注意している。

二、トリアデノウイルス

トリアデノウイルスに対してはテトラサイクリン系の抗生物質による治療を行なつてきたが、薬品投与の副作用もあらわれ、投薬に對しての慎重なあつかいが問題となつた。

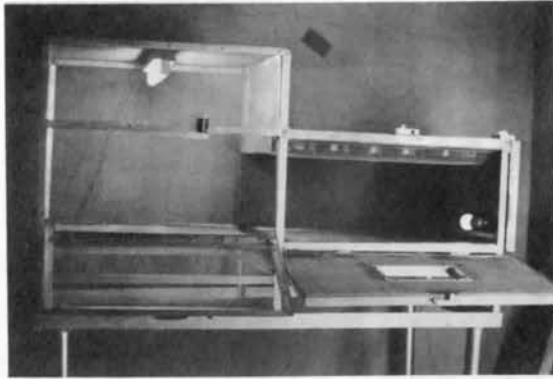
三、事故死

№7は食欲が急になくなり死亡したが、解剖の結果胃壁を針金がつきやぶつていた。飲みこんだ針金は掃除に使用していたデッキブラシのものであつた。以後、デッキブラシはシユロ性のものを使用している。

剖の結果胃壁を針金がつきやぶつていた。飲みこんだ針金は掃除に使用していたデッキブラシのものであつた。以後、デッキブラシはシユロ性のものを使用している。

四、毛体虫症

毛体虫は寄生虫であるが、どのような感染経路をたどつたのかは不明である。寄生部位は盲腸であつた。毛体虫卵の検出がみられてから他の飼育ライチヨウには駆虫薬の投薬を一週間づつ計二回行ない、投薬中、投薬後の虫卵検査を実施した。投薬後の虫卵検査はいずれも陰性であつた。



育雛器

図2 雛の病気

番号	産地	性	フ化日	死亡日	日齢	病名	備考
1	山博	♂	S51.7.9	9.11	64日		コクシジウムが検出
2	越ヶ岳		S54.7.9	7.24	18日		小腸ひはく左脇にアワ粒大白色壊死点
3	*		S54.7.9	7.31	22日		小腸壁ひはく左脇に小豆大の黄色を呈し白斑もみられる
4	*	♀	S54.7.9	7.19	10日		腸胃及び気のうに出血
5	*	♀	S54.7.5	8.4	27日		脾臓、肝臓 3~4倍に膨大肝は左右とも半分がチヨコレート色、水腫又は出血
6	*	♂	S54.7.8	7.23	15日		肝臓ははれていてもいい

毛体虫は鶏にとつて、少数寄生では病徴が現れないとされているが、ライチヨウにとっては致命的となりうるようである。

五、その他
盲腸内容物の充満、盲腸のゆ着がみられた。原因として考えられたのは、飼料の繊維不足あるいは繊維質の問題や抗生物質投与による有効な腸内細菌までの破綻などである。飼料の繊維質についてはナラの乾葉をミールにしたものを中心に配合したり、青菜もうぐいす菜ばかりでなくミツバなどライチヨウの生活にあわせて繊維の多いものを与えている。

腸内細菌の問題では、飼料用活性納豆菌B N株含有の薬品を投与し、体内の消化を助成させた。

六、まとめ
今まで述べた病気の症状があらわれても、適切な処置がとれなかったが、今後同じような症状があらわれた時は、治療や衛生管理など、即座に対応できるものと思う。ライチヨウの飼育では病気の治療よりむしろ、病気の

事故の予防に務めることが課題である。現在飼育管理の面からの感染予防として、いくつかの方法を実施している。

餌については、通年入手が可能なもの、衛生上安全なものを用いている。配合飼料は原料を入手しての自家配合飼料であり、青菜類は流水を充分して砂や土の付着していることのないようにしている。

飼育舎の管理では、飼育舎付近の土にサラシ粉を散布し、飼育舎へ向う通路には平板を敷き、直接土の上の歩行を避けている。また入室する前の長ぐつでの消毒とはきかえを実施している。ライチヨウ舎は、年二回の砂の入れかえと、ジェットクリーナーによる蒸気消毒を行ない、毎日の飼育時には糞の除去とコンクリート面の水洗いを行なっている。

フ卵舎と幼鳥飼育舎は使用前に器具と共にホルマリソクン蒸を実施している。

雛の死亡

飼育下において雛の死亡率は高く、しかもそのほとんどが二週令以内で集中している。原因究明のため死亡した雛の解剖も個体が小さく難を極めていた。

昭和五十二年家庭用クーラーで冷房可能な幼鳥飼育舎が建設され、翌年からの育雛はそ

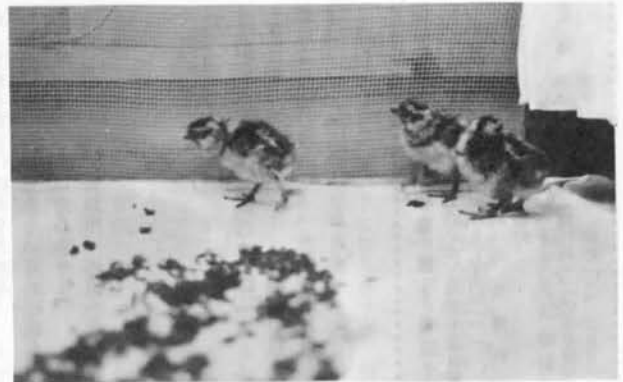
こで行なった。この建物はクーラーの効率を高めるためガラスの二重窓と二重ドアの構造にした。ところがこの二重構造が思わぬ惨事を招いた。

育雛初期のライチヨウは個体が小さく自分の体温を保持できないため、人工的に加温してやらなくてはならない。育雛器はこのようにライチヨウを暖めてやる部分と、餌を食べたり運動する部分とにわかれている。前者を温室、後者を冷室と呼んでいる。高山帯のライチヨウの生活からみて、冷室を摂氏二十度前後にするためクーラーを稼働させ、温度を摂氏三十六度にするという方法をとった。

ライチヨウがねやいり(ねむりにつくこと)に入ってから温室の温度をなるべく一定にし、朝までライチヨウがねむれる状態をつくってやらなくてはならない。そこで夜間はクーラーを止め、保温のために育雛器に毛布をかぶせていた。密閉された部屋で夜間の約十時間、ライチヨウが数羽といえども呼吸で消費される酸素は少なくないはずである。

幼鳥飼育舎での飼育を開始した昭和五十三年と五十四年に死亡したライチヨウでは肺に異状がみられ、しかも育雛段階で死亡している。松本家畜保健衛生所の指摘では、鶏舎などでは空気中に約二十パーセントの酸素があるが、換気などしないと部分的には十六から十八パーセントにもなり、十八パーセントをわると開口呼吸をして苦しうになり、長時間になると心臓に負担がかかり死亡してしまうという。ところが新鮮な空気が入ると同時にまったく正常な呼吸方法になつてしまふというので、我々もこの点についての発見が遅れてしまった。

そこで昭和五十五年の育雛はガラスをはずして網を取り付け、夜間もクーラーを稼働したままで、酸素メーターによる濃度測定をしながら行なった。六羽の雛は無事育成して、冬の白色から夏の褐色へと衣がえをはじめた。



元気なヒナ

現状

昭和五十五年度は雄二羽の飼育からスタートし、採卵をして人工フ化、人工育雛で雌六羽の育成に成功した。現在八羽のライチヨウは順調に飼育中である。冬の降雪量が多く、飼育舎の中や、まわりにはまだ雪が残っているが、二羽の雄は内冠を赤く開き、盛んに威嚇するようになってきた。これから繁殖期に向かい、ライチヨウの行動をみながら作業を進めていきたい。

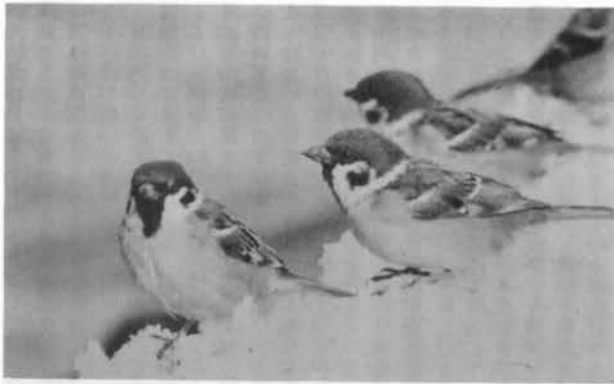
ライチヨウの飼育にはまだ未知な点が多く、問題は山積みになされているが、今後はこれまでの資料を土台とし、一日も早い飼育の技術を確立して、ライチヨウの保護に役立つ基礎的資料を残したいと思っている。

(大町山岳博物館 学芸員)

スズメの住まない島

— 舳倉島 —

佐野昌男



雪国のスズメ(瓢湖にて81.2.2)

スズメは、人の住む環境に深く結びついて生活しています。したがって、人の住む所には必ずスズメが住んでいると言っても過言ではありません。私も過去二十年間、各地でスズメの調査をしてきましたが、人の作り出す環境の違いに影響を受けてその生息密度の差は認められましたが、スズメの住んでいない所はありませんでした。たゞ、一九七七年一月は小笠原の父島と母島を訪れたとき、両島の人家集落に全くスズメがおらず、奇異な感じを受けたことがあります。しかし、本土から小笠原諸島は一〇〇〇kmもの海上にあることに原因があるためと簡単に片づけられて

ました。

その後、ヨーロッパ各地でスズメがいなくてイエスズメがいる都市、イエスズメが少なくスズメが87%も住んでいる所などを見た。台湾山地民族の集落で、ニューナイスズメはいるがスズメのいない村落、このどちらもない村落などを見てきて、同じ人家集落でありながらどうしてスズメが住んでいない所とそうでない所があるのか不思議に思っていました。

私は、昨年の七月下旬、石川県輪島市の北約五十kmの海上にある舳倉島を訪れ、数日間島の調査をしました。スズメが一羽も観察されず、この原因を考えてみました。

この島は周囲およそ六kmの小さな島です。島の西海岸は岩礁地帯で、東海岸には港があり、ここを中心に人家が冬の季節風をさけ、南北に広がっています。島の中はかつては畑もありましたが、今はスキ草原になっています。島の中央の高い部分にはクロマツが強風にさらされ、風下に傾き茂っています。

また、島には夏が百二十世帯、冬でもこの近海がブリの好漁場であるため四十世帯が住んでいて、小中学校や保育園も通年開設されています。かつて、この島は夏だけ人の住む島でしたが、現在では船の性能が上がって真冬でも定期便が輪島から来れるようになり、一年中人が住めるようになりました。

次に、この島の過去数年間のスズメの渡来記録を調べてみると図のようでした。すなわち、三月下旬から六月中旬にかけて、一羽から三羽くらいが断続的に現われては消え去っています。また、九月中旬から十一月初旬にかけて、四羽から十羽くらいが入り出して

います。たゞし、一九七六年の九月に例外的ですが、二十羽の群れが入ってきて、再び姿を消しました。

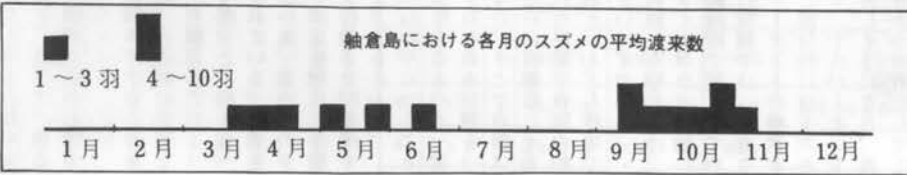
これらの条件だけを見てみると、この島にスズメが住んでいても何ら不思議ではありませんが、実際には全く繁殖が認められないのです。

なぜでしょう。私は考えられるいくつかの要因と一つの仮説をもちました。

まず、スズメは一つの個体群を維持するには、最低二十つがいが必要であるということ。私が北海道各地の調査で明らかにした生息密度は四十三・五羽/km、伊豆諸島では四十・五羽/kmが最低の値でした。これは舳倉島へ渡ってきたスズメのいくつがいかが、一時的に繁殖活動に入ったとしても個体群の維持は不可能で留鳥として留まる

ことができないのです。次に、スズメの寿命はおよそ二三年であるという事実です。飯山市の分道という人家十二軒の部落での数年間の調査によると、毎年全群の三分の一が消耗し、新個体による補充がなされています。すなわち、舳倉島に二十つがいの生息を考えたとき、毎年十三〜十四羽の新個体の補充が保障されなければならないのです。しかし、現状では〇羽、一羽、二羽、三羽、多くて五羽、例外的に二

舳倉島における各月のスズメの平均渡来数



十羽という数が認められていますが、このような不安定な個体供給では、ポピュレーションの維持は不可能です。

このほかに、この島の集落は小さくて、しかも一つしかないこと、耕地が全くないことなどに冬の自然条件が厳しいことなどもスズメの生息を不可能にしている要因として考えられます。

以上述べてきたように、舳倉島には最低の個体群を維持するだけのスズメが入ってきませんが、これはこの島がスズメの移動経路からはずれているためと考えられます。この移動経路上にある集落は常に安定した個体の補充が可能で年間スズメが生息でき、たゞ、その中に新しくできた新興住宅地であっても条件さえそろえばすぐにスズメが定着します。しかし、移動経路からはずれている集落は、島であっても、内陸の集落であっても偶発的に現われるスズメが認められても個体群維持ができるまでには至りません。

今後、この目に見えない移動経路を明らかにしていかなければなりません。(長野市 城東小学校教諭)

博物館だより

「山と博物館」購読料の値上げ
第三種郵便物の値上げ、印刷費の値上げなどにより四月号より、一カ年の購読料を二二〇〇円(郵送料共)に改めます。

山と博物館 第26巻 第3号

発行所 長野県大町市TEL②(026)211

印刷所 大町山岳博物館

大町山岳博物館 大町山岳博物館

定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野)一三、二九三